Ⅰ地形・歴史 Topography & History

1 地形等

市の西部、阿武隈高地に位置し、13 地区では最も面積が広い。西は田村郡、石川郡と接している。

東に水石山、西に芝山がそびえ、平地でも平均海抜は 460ｍもある。地区の中央を国道 49 号に沿って好間川が、東方を南北に小玉川、北方を東西に三坂川が流れ、河川に沿って集落地域を形成している。

山林面積が多く(83%)一次産業中心であるため、住宅以外は山林、農地が大部分を占める。近年の道路網整備による交通量の増加、生活様式の多様化等により徐々に古来の自然環境が失われつつある。

2 歴史

下市萱の竹之内遺跡は縄文時代早期(BC6000 年頃)の竪穴式住居跡で、この地に集落があったことが証明される。

嘉吉 2 年～寛正 7 年(1442～1466)頃は、いわき地方の国人領主が白川(結城)氏、石川氏等の周辺国人を巻き込んだ争いの時期で、岩城氏が惣領主(＝郡主)の地位を確立した。この争いの講和を推進した白川氏は、宝徳 3 年(1451)好間(岩城)隆衡から長井村を譲られている。

天正年間(1573～1592)三阪氏が三倉城を、平山氏が中寺館にて統治。

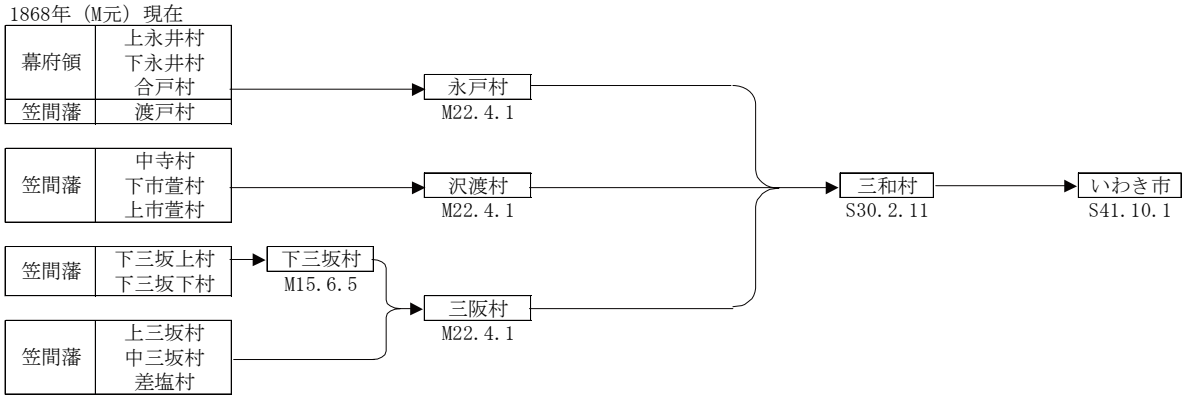
寛永 11 年(1634)菊田郡泉藩領となるが、元禄 15 年(1702)泉藩は 2 万石から 1 万 5 千石となり、減石された 5 千石は合戸村・渡戸村・三坂村・市ヶ谷村(市萱村)・中寺村で、この地は幕府代官所の直轄支配となった。

寛延 2 年 (1749)常陸国笠間藩の領地(渡戸・中寺・下市萱・上市萱・上三坂・中三坂・下三坂・差塩)となるが、上永井、下永井は小名浜代官所の支配に置かれる。

明治 12 年(1879)戸長役場を中寺地内、差塩村地内に設置。

明治 22 年(1889)三阪村と沢渡村を組合村、永戸村と箕輪村を組合村として、事務所をそれぞれ下市萱と合戸に置いた。

昭和 30 年(1955)永戸村は、沢渡・三阪組合村と合併し、三和村として発足した。

(参考文献:「いわき市史」、「新しいいわきの歴史」)

※行政区域の変遷